

第三十七回

松山喜多流能

令和五年七月九日(日)午後一時始

松山市民会館小ホール能舞台

湯谷

三段之舞

金子敬一郎

狂言
舎弟

古川喜郎

雷電

金子龍晟

主な出演者(重要無形文化財総合認定者)

シテ方 喜多流

金子敬一郎 金子龍晟

塩津哲生

中村邦生 長島茂 狩野了一 友枝雄人 内田成信 佐々木多門 大島輝久 友枝真也

塩津圭介 佐藤寛泰 谷友矩 狩野祐一

ワキ方 下掛宝生流

宝生欣哉 宝生尚哉

大鼓方 葛野流

亀井広忠

笛方 森田流

槻宅聡

狂言方 大蔵流

古川道郎 古川喜郎 佐々木泉

小鼓方 幸流

曾和正博

太鼓方 観世流

林雄一郎

チケット申込・お問合せ先

鑑賞券8,000円 学生券2,000円 (25才未満)

TEL 089-931-6928(金子舞台)

Web: <https://kita-kaneko.com/>

E-Mail: ticket@kita-kaneko.com

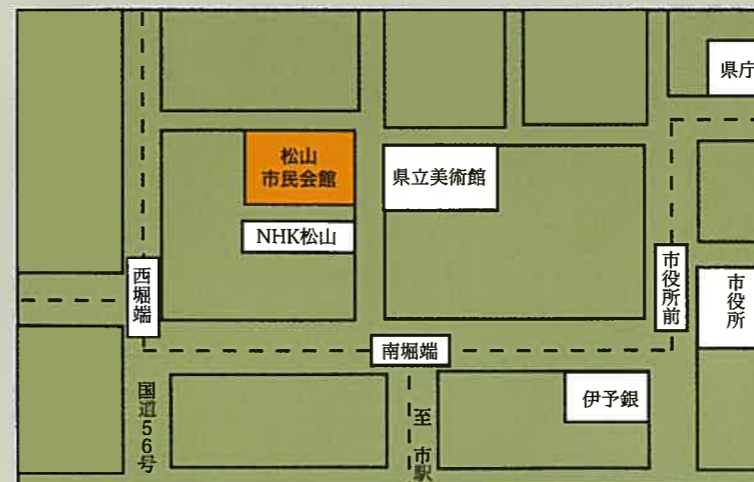


会場

松山市民会館
小ホール能舞台

愛媛県松山市堀之内

TEL 089-931-8181



主催 愛媛喜多会

後援 愛媛県・愛媛県教育委員会
松山市・松山市教育委員会
愛媛新聞・南海放送株式会社
テレビ愛媛・あいテレビ
愛媛CATV
(公社)愛媛能楽協会

許可無き者の演能中の写真撮影、録音、録画は固くお断り致します。

番組

… 解説 … 大島輝久

シテ連・朝顔 狩野祐一

シテ・湯谷 金子敬一郎

能 湯 谷

三段之舞

ワキ・平宗盛 宝生欣哉

ワキ連・宗盛の従者 宝生尚哉

大鼓 亀井広忠

小鼓 曾和正博 笛 槻宅 聡

後見 塩津哲生
内田成信

地謡 谷 友矩 佐々木多門
塩津 圭介 狩野了
大島 輝久 長島 茂
佐藤 寛泰 友枝 雄 人

… 休憩二十分 …

狂言 舍 弟

古川喜郎

佐々木 泉
古川道郎

… 休憩十分 …

後シテ・雷神 前シテ・菅原道真の霊 金子龍晟

能 雷 電

ワキ・法性坊 宝生欣哉

ワキ連・従僧 宝生尚哉

間・所の者 古川喜郎

大鼓 亀井広忠

小鼓 曾和正博 太鼓 林 雄一郎
笛 槻宅 聡

後見 金子敬一郎
大島輝久

地謡 狩野 祐一 友枝 真也
佐藤 寛泰 内田 成信
塩津 圭介 中村 邦生
谷 友矩 佐々木 多門

附 祝 言

終了予定 午後5時頃

湯谷 三段之舞

(ゆや さんだんのまい)

平宗盛は、遠江(静岡県)の池田の宿の長を愛妾として都に長く留めている。その湯谷が故郷に残している老母が、病氣となり、湯谷の帰郷を促す手紙を、伴女の朝顔がたずさえて、都へ上つて来る。心弱くなっている母の様子に、湯谷は宗盛のもとに行き、その手紙を見せて、暇を乞うことにする。湯谷は宗盛の前で老母の手紙を読み上げ、いま一度母に会いたい、帰郷を願うが、許されない。宗盛は湯谷の心を引き立てようと、花見の供を命じ、牛車に乗って一緒に清水寺へ向かう。都大路の春景色にひきかえ、車中の湯谷は、ひたすら母を案じ、清水へ着いて車を降りると、まず観世音に母の命を祈る。やがて、花の下で酒宴が始まり、湯谷は宗盛の勧めで、心ならずも、興を添えるために、あたりの風物を眺めながら舞をまい、花の美しさをたたえる。ところが舞の途中で、にわか村雨が降り出し、花を散らす。湯谷は舞をやめ「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と一首の歌を詠み、それを短冊にしたためて、宗盛に差し出す。その歌を詠んだ宗盛は、さすがに湯谷の心を哀れと思ひ、東国へ帰ることを許す。湯谷は喜び、これも観世音のおかげと感謝し、またもや宗盛の気持ちの変わらぬうちに、その場から故郷へと急ぐ。

小書「三段之舞」は中之舞の構成が常と変化した湯谷の早く故郷へ帰りたい気持ちを表現する。

舍 弟

(しやてい)

兄からいつも「舍弟、舍弟」といわれている弟。ところがこの弟、「舍弟」という言葉の意味を知りません。そこで物知りの何某に尋ねに行きますが、何某は弟の無知に驚き、からかってやろうと思いたちます。そしてあるうことか「舍弟とは『泥棒』のことだ。」と教えてしまいます。怒った弟は…

雷 電

(らいでん)

比叡山延暦寺の座主法性坊の僧正が仁王会を執り行う夜すがら、地方官庁の太宰府に左遷されて憤死した菅公の亡霊が訪れる。僧正は幼く、身寄りとなない菅公を養った親であり、師であった。久しく会わないことを文章に述べ表したのち、菅公の霊は、自分は雷となつて、生前、自分を冷淡な待遇をした宮廷人たちを蹴り殺さんと思ふが、異変にあたつて僧正が内裏に召されたら、それには応じてくれるな、と懇願する。僧正は二度までは謝絶するが、勅使が三度に及ぶときは力なし、と答えるや菅公の霊は形相すさまじくやわに本尊の供物の柘榴(ざくろ)を噛み砕いて妻戸に吐きかけ、たちまちそれが火炎となつて燃え上がると僧正は鑲字(はんじ)の経文を唱え、『灑水(しやすい)』の印を結び、菅公の霊は、火炎が消える煙の中に姿を消した。(中入)案の定、僧正は内裏へ召され、法華普門品を誦するおりに、暗雲とぎし雷鳴とどろき、雷と化した菅公が現れる。紫宸殿、清凉殿、弘徽殿と、祈る僧正と鳴り渡る菅公は、追いつ追われつともみあううち、ついに法力に屈したが帝は「天満大自在天神」の称号を贈り、菅公はこれまでなりと虚空に消え失せるのだった。